



## 乳泉村の子 (清涼寺鐘聲／The Bell of the Qing Liang Temple)

2007(平成19)年11月17日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

監督=謝晋シェン・チン／出演=丁一テイ・イー／栗原小巻リハラコマキ／濮存昕プー・マンシン／尤勇ユウ・ユウ／リー・ティンリィン／江化霖カン・ホワリン／朱旭チュウ・シュウ／張輝チャン・グイ／稲岡正順イナノマサノブ／川田あつ子カワタアツコ (東宝東和配給／1991年中国、香港映画／121分)

……日本で一番有名な中国映画をあらためて鑑賞。映画が描くのは、日中戦争の終了によって母親と引き離された日本人孤児をめぐる人間ドラマ。育ての母親たち中国人一家の苦勞と、日本でわが子との再会を果たした生みの母親の喜びは、共に感動的。日中の心の交流を温かく描いたこんな映画で、涙を流したいものだ。

### 『芙蓉鎮』『阿片戦争』に続いて謝晋シェン・チン監督作品を

『中国映画の全貌2000』によれば、「中国の黒澤明」と呼ばれている謝晋シェン・チン監督は、新中国誕生直前の1948年、21歳で新劇の世界から映画界に入ったとのこと。また、「28歳の処女作『控訴』から、74歳を迎えた1997年の『阿片戦争』まで26作全てが中国人の眞の姿を眞摯に描いている」とのこと(25頁)。

私が観たのは代表作の『芙蓉鎮』(87年)と『阿片戦争』(97年)だが、両者とも最高の作品だった。『乳泉村の子』はその中間の1991年の作品だが、ヒューマニズムに溢れる映画づくりは『芙蓉鎮』と全く同じ。『芙蓉鎮』は文化大革命の中で迫害され、翻弄される男女の姿をリアリズム豊かに描いた感動作だが、テーマがテーマだけに日本人にはわかりにくいことは仕方ないところ。

しかし『乳泉村の子』は、1945年8月15日の日本敗戦直後、中国残留孤児となってしまった男の子を軸に描く、日中双方を舞台とした感動ドラマだから、日本人にはこちらの方が格段にわかりやすいはず。そんな第3世代監督である謝晋シェン・チンの名前はしっかりと記憶してほしいところ……。

## 日本で1番有名な中国映画……？

私が『乳泉村の子』を3年前の「中国映画の全貌2004」で観なかったのは、テレビで何回かこの映画を観ていたため。しかし、何かをしながらテレビで観るのと、スクリーン上で観るのとではやはり集中力が全然違う。テレビの時は涙を流すことはなかったが、スクリーンを観ていると思わず涙が……。

中国映画が日本で一般的になったのは、1999年の『山の郵便配達』あたりから。そしてそれが『初恋のきた道』(00年)で少し定着することに……。また、張藝謀<sup>チャン・イーモウ</sup>監督がハリウッド進出をかけた『HERO (英雄)』(02年)以降、日本の若者も張藝謀<sup>チャン・イーモウ</sup>、陳凱歌<sup>チェン・カイコー</sup>監督の作品を観るようになったが、『黄色い大地』(84年)、『紅いコーリャン』(87年)に触発された中国映画ファンは、年配者やこだわり派がほとんどだったはず……。そんな日本における中国映画の状況の中、1991年の『乳泉村の子』は、中国残留孤児という大きな社会問題をテーマとただけに、広く日本にも受け入れられたようだ。そして、私がテレビで何回も観ているくらいだから、『乳泉村の子』は日本で1番有名な中国映画……？

## 栗原小巻の熱演に拍手！

栗原小巻は最近映画で全然見ていないが、私が1番印象に残っているのは、『サンダカン八番娼館 望郷』(74年)。彼女は1945年生まれだから、1991年の『乳泉村の子』出演当時は46歳。したがって、乳飲み子を一人中国に残して日本に戻っていく母親と、今は立派に成人した息子を日本で迎える母親、という20代(?)と60代(?)の極端な2役を演ずるのは大変だったはず。

しかし、根が大変な美人だけに、若い母親を演じて何の違和感もないのはさすが。とりわけ、無理やりトラックの上でわが子と引き離される状況下、子供の名前を絶叫するシーンは大いに心を打たれる熱演。また、そんな栗原小巻が、父親そっくりに育った明鏡法師<sup>ミンチン</sup>(濮存昕)と自宅でゆっくり2人で過ごす静かなシーンも感動的。芸達者な栗原小巻の熱演に拍手！

## 犬坊の泣かせる演技に注目！

中国では赤ちゃんにとりあえず仮の名前をつける習慣があるらしい……。置き去

りにされた乳飲み子を拾った羊角(丁一)は、その男の子をとりあえず犬坊と名づけたが、実はこれはじっくり検討した結果ではなく思いつきのいい加減な命名。しかし、その犬坊は今や中国仏教代表団の一員として来日するグループの若手代表に選ばれるという立派な明鏡法師に成長したわけだが、そこに至るまでには数々の大きな苦労があったはず。

中国映画は、また謝晋監督はそういう姿の描き方が実にうまく、泣かせるシーンが次々と登場するので、この映画についてはハンカチ必携。なお犬坊役として、幼少時代と子供時代の2人の子役が登場する(赤ちゃん時代は別として)が、圧倒的に泣かせるのは幼少時代の犬坊。2人の犬坊の熱演にタップリと涙を流してもらいたいのだ。

### 羊角家族の悲劇にも涙が

終戦直後、侵略者の子である犬坊を育てるのに周囲に多くの抵抗があったのは当然。もちろん羊角自身だってそれは同じだし、多くの周りの人々と対立してまで犬坊を育てる必要がないのも当然。また、娘の秀秀(リー・ティン)はかわいい赤ちゃんをかわいがったが、口と耳が不自由な長男胡蘆(尤勇)はそんな赤ん坊をうっとうしく思ったのは当然。しかし、謝晋監督は、この羊角家族のそんな葛藤を温かい視線で見つめながら、犬坊と胡蘆が次第に絆を深めていく様子を描いていく。

ところが、ある日そんな胡蘆に大きな不幸が……？ さらに、いつかは娘の秀秀も嫁に行かざるをえないが、羊角と秀秀との別れの日はいつ、どういう形で……？ そんな羊角家族の悲劇を前に、あなたの目は真っ赤になっていくはず……。

### 母子再会を段取りしたキーウーマンは……？

大島和子(栗原小巻)が仏教団来日を知ったのは、食事している時新聞でひよっとしてと思い、テレビで注意して観ると、これはまちがいなしと思うように……。そこで、仏教団が滞在しているホテルに連絡して世話係兼通訳の加藤美智子(川田あつ子)を呼び出し、秘かに明鏡の様子などを質問したが、美智子はこの段階でひよっとして中国残留孤児である明鏡の実の母親では、とピンときたよう。そこで彼女は、和子からもらった住所を書いたメモを、そのまま明鏡に渡し、「この人が再会を希望しています」と伝えてきたから、明鏡にも何かピンときた様子。

中国残留孤児が成長した今、数十年ぶりに母親との再会を果たすといっても、その状況設定が簡単でないのは当然。その点、2人の再会の手はずをうまく整えたこの美智子女史は世話係兼通訳として優秀だっただけでなく、人の心を理解する人間として、若いのに立派なもの……。

## クライマックスは自宅での再会シーン

今、美智子が明鏡<sup>ミンチン</sup>をタクシーに乗せて訪れてきたのは、和子が住む家。美智子は前に1度訪問済みだが、明鏡<sup>ミンチン</sup>はもちろんこれがはじめて。もっとも、明鏡<sup>ミンチン</sup>の講話の席に出席し、後方の席に座っていた和子を発見した明鏡<sup>ミンチン</sup>は、すぐにこれは……？ と思ったようだが、それはまだ確信ではない時の話。タクシーを降りて2人を引き合わせ、「ごゆっくり」と言い残して自分はタクシーで去って行ったから、その後に展開される家の中での母子再会のシーンがこの映画のクライマックス。

2007(平成19)年11月29日記